法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

YAMAGUCHI, Kyoko / 山口, 恭子

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
68
(開始ページ / Start Page)
37
(終了ページ / End Page)
53
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010055

Hosei University Repository

『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行

山口恭子

はじめに

近世の出版の発展によって、文学・学問等、諸文化は広く開放された。書芸術の分野もその例外ではない。鑑賞用として、あるいは手本として、多くの名筆が摸刻され、紙上に再生されていった。

こうした流れのなか、本阿弥光悦（永禄元―寛永十四年〈一五五八―一六三七〉）の筆跡もまた、印刷された。近世初期の芸術家として広く知られる光悦は、とりわけ書の世界において名高い。大胆な筆法と緩急の差がおりなすリズミカルな書は、俵屋宗達の下絵を有する「鹿下絵新古今集和歌巻」、「蓮下絵百人一首和歌巻」などによって知られていよう。光悦書風の追随者が増えてゆくなかで、光悦流の手本類が開版されるのは当然のなりゆきであったといえる。

こうした光悦流の摸刻を考えるうえで、『歌仙大和抄』（二巻二冊。元禄七年〈一六九四〉刊）の存在は興味深い。同書は、三十六歌仙の和歌・歌仙絵に、歌仙の略伝、和歌の注釈、ならびに歌意絵をとりあわせた、初学者向けの注釈書である。ことに特徴的であるのは、外題を「悦光哥仙やまと抄」（国立国会図書館本下巻等）とするように、和歌三十六首が光悦書風の散し書きによって刷られているという点である。[1]

光悦流で印刷された三十六歌仙和歌といえば、嵯峨本[2]が想起されよう。鈴木淳氏は、嵯峨本の三十六歌仙版行後、その覆刻や追随作が続いたことについて、「（稿者注、嵯峨本）光悦三十六歌仙」が与えたインパクトがそれほどに大きかったからであろう[3]」とし、『歌仙大和抄』もまた、「「光悦三十六歌仙」の余韻を強く感じさせる」と述べておられる。

一方、『歌仙大和抄』が、三十六歌仙和歌の注釈書である以上、その注釈史上の位置付けについても当然留意すべきであろう。これについては、新藤協三氏が、『歌仙大和抄』は『歌仙金玉抄』（二巻二冊。天和三年〈一六八三〉刊）の「内容を簡略にした[4]」ものと述べておられる。

このように、これまで『歌仙大和抄』は、光悦流による三十六歌仙の摸刻として、ならびに、三十六歌仙和歌の注釈書として注意がはらわれてきた。ただし、同書に対する伝本研究等は、必ずしもじゅうぶんではなかったように思う。『歌仙大和抄』は、書研究においても、光悦流筆

Hosei University Repository

跡の流布という問題に新たな視座を与えてくれるものであり、基礎的な検討を加えておくことはあながち無用な試みではないだろう。

本稿では、『歌仙大和抄』について、まずは伝存本を整理し、書誌的な報告を行う。そのうえで、『歌仙金玉抄』からの流れを跡付けてみたい。さらに、近世における光悦流手本の版行という視点からも、『歌仙大和抄』をとらえてみたいと思う。

一　『歌仙大和抄』の諸本と特徴

まず、『歌仙大和抄』について概略を示しておく。上巻は全十八丁からなり、第一丁表に武陽桃仙子による序文[5]、第一丁裏以降に、柿本人丸以下十七人の歌仙絵・和歌・歌仙の略伝・和歌の注釈・歌意絵を収載する。次いで下巻は全二十丁からなり、第一丁表に口絵、第一丁裏以降に、斎宮女御以下十九人の歌仙絵・和歌・歌仙の略伝・和歌の注釈・歌意絵を収載する。このうち、和歌が光悦流で刻されている（図1）。画工は未詳である。

その体裁を詳述すると、歌仙絵と和歌とで半丁が、略伝・和歌の注釈・歌意絵でさらに半丁が用いられており、それら一首ぶんの情報が見開きに収められるということになる。紙面構成は、例えば、上巻第一丁裏に人丸の歌・歌仙絵が、第二丁表に人丸の略伝・和歌の注釈・歌意絵が刻され、続く第二丁裏には、紀貫之の略伝・和歌の注釈・歌意絵、第三丁表には貫之の歌と歌仙絵が刻されるといったように、和歌・歌仙絵、そして、絵抄とが、見開きの左右交互に入れ替わりながらあらわれる配置

Image: TNM Image Archives（画像の無断複製を禁ずる）

図1　武陽桃仙子序『歌仙大和抄』（東京国立博物館本）

Hosei University Repository

になっている。

この『歌仙大和抄』は、どの程度流通したのだろうか。次に、『歌仙大和抄』の伝存本について整理したい。

これまで管見にはいった『歌仙大和抄』は、以下のとおりである。

元禄七年（一六九四）刊本

・都立中央図書館加賀文庫蔵（加賀文庫七〇九五）存下巻（『加賀文庫目録』に『和歌三十六歌仙』として登録されるもの）

元禄九年（一六九六）印本

・東京国立博物館蔵（と二一〇四）

・国立国会図書館蔵（二一四―一一六）

・国文学研究資料館蔵（ナ二―五二七）

・四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵（恩八三四）存下巻

刊年不明

・弘前市立弘前図書館蔵（W九一一・一―四七）存上巻

まず、元禄七年刊本については、右掲のとおり、現段階では加賀文庫本を確認したにすぎない。この加賀文庫本は下巻一冊が伝存するのみではあるが、左に書誌を記しておく。

都立中央図書館加賀文庫蔵（加賀文庫七〇九五）存下巻一冊

原装茶色草花文様表紙（二十六・九×十八・九糎）。原題簽は欠失。表紙中央、題簽の剥落跡に「和歌三十六哥仙　全」と打付書。四周単辺（二十一・六×十五・四糎）。丁付けが各丁表のど付近にあり、綴じが深いが、「哥ノゑ十一 下」などと刷るのを確認しうる。刊記「元禄甲戌孟春吉旦／武江呉服町二丁目書肆／伊勢屋孫三郎梓」。印記「近藤林／蔵置印」「加賀文庫」「東京都／立図書／館蔵書」。なお、漆山又四郎『絵本年表』[6]には以下の記載がある。

三十六歌仙　大本二冊　三十六丁　元禄甲戌孟春吉旦

画工不明　光悦風之書　武江呉服町二丁目

序武陽桃仙子　伊勢屋孫三郎梓

書名こそ異なるものの、『歌仙大和抄』元禄七年刊本を指すものであろう。また、鈴木淳氏も言及されているように、平成二十一年度『古典籍展観大入札会目録』[7]に、「悦光歌仙大和抄」として、この伊勢屋版が掲載されている。

次に、元禄九年印本についてみてゆこう。まずは、東京国立博物館本にもとづいて、書誌を記す。

東京国立博物館蔵（と二一〇四）二巻二冊

原装水色草水鳥文様表紙（二十六・九×十八・五糎）。上巻表紙中央の原題簽に「□□哥仙大和抄　上」と刻す。下巻題簽は欠失。なお、原表紙の上に後補朱色表紙が付されており、中央に「哥仙大和抄上（歌仙大和抄　下）」と打付書。四周単辺（二十一・三×十五・四糎）。丁付けが各丁表のど付近にわずかに見え、上巻に「哥ゑノ一」、下巻に「哥ゑ十四 下」などと刻す。[8]刊記「元禄九丙子歳卯月吉祥日／江戸橋中通川瀬石町山口屋／須藤権兵衛開版」。刊記部分の匡郭に入れ木によると見られるずれあり。印記「国立博／物館図／書之印」「徳川宗敬氏寄贈」等。

先の元禄七年刊本と、この元禄九年印本下巻とは、刊記以外同版である。須藤権兵衛は、先立つ伊勢屋孫三郎版の版木を入手し、刊記部分に

Hosei University Repository

入れ木を施したうえで本版を刊行したのであろう。なお、管見の元禄九年印本のうち、東京国立博物館本、国立国会図書館本、国文学研究資料館本[9]は、すべて同版と判断できる。

ただし、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫本については、以下の点でやや注意を要する。まず、一点目として、下巻第一丁表に付される口絵上方に、「哥仙やまと抄」の文字が刻されていること、二点目として、刊記を「元禄九丙子歳卯月吉祥日／山口屋／須藤権兵衛開版」とし、他の元禄九年印本にある「江戸橋中通川瀬石町」を欠くということである。

『改訂増補近世書林板元総覧』[10]によると、須藤権兵衛は、元禄・宝永ころに江戸日本橋川瀬石町横町に所在、後、宝永四年（一七〇七）、正徳四年（一七一四）には、日本橋南仲通一丁目へ移転していることが認められるという。恩頼堂文庫本は、年記には「元禄九年」とあるものの、住所を移してから刊行されたものと考えるのが穏当だろう。その際、刊記の「江戸橋中通川瀬石町」を削り、さらに、それまでにはなかった口絵上方の内題をあらたに彫刻したということになる。なお、恩頼堂文庫本の原題簽は破損が著しいものの、「□図□哥□□□」との印字が確認でき、少なくとも外題角書をあらためたうえで版行されたらしいこともうかがえる。

以上、『歌仙大和抄』伝存本について眺めてきた。これまで確認しえた伝本は比較的少ないものの、数次にわたって版行が繰り返されていたことがわかる。元禄期を中心に、相応の需要があった書物であったことが理解できよう。

二　『歌仙大和抄』所収和歌について

これまで、『歌仙大和抄』の伝本の様相について眺めてきたが、次に、同書の本文内容、とくに所収された和歌について確認してゆきたい。

収録の和歌三十六首を、以下、東京国立博物館本に基づき記す。表記は底本のままとし、私に通し番号を付した。

（上巻）

一、左　柿本人丸　ほの〳〵とあかしのうらの朝霧に嶋かくれ行ふねおしそ思ふ

二、右　紀貫之　桜ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そ降ける

三、左　凡河内躬恒　いつくとも春のひかりはわかなくにまたみよし野の山はゆきふる

四、右　伊勢　三輪の山いかにまちみむ年ふ共たつぬる人もあらしと思へは

五、左　中納言家持　はるの野にあさるきゝすの妻恋にをのかありかをそことしれつゝ

六、右　山邊赤人　和歌の浦にしほみちくれはかたを波あしへをさして田鶴鳴わたる

七、左　在原業平　世中にたえてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし

Hosei University Repository

八、右　僧正遍昭　たらちねはかゝれとてしもむは珠の我くろかみはなてすや有けん

九、左　素性法師　見わたせは柳さくらをこきませて都そはるのにしき成ける

十、右　紀友則　ゆふされは佐保の川原の川風に友まとはしてちとりなく也

十一、左　猿丸大夫　遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥哉

十二、右　小野小町　わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなむとそおもふ

十三、左　中納言兼輔　みしか夜の更行まゝに高砂のみねの松風吹かとそ聞

十四、左　藤原興風　誰をかもしる人にせんたかさこの松もむかしの友ならなくに

十五、右　藤原高光　かくはかりへかたくみゆる世中にうらやましくもすめる月かな

十六、左　源公忠朝臣　行やらて山路くらしつ郭公いま一こゑのきかまほしさに

十七、右　壬生忠岑　ねのひする野邊に小松のなかりせは千代のためしに何をひかまし

（下巻）

十八、左　斎宮女御　琴の音にみねのまつかせ通ふらしいつれの緒よりしらへ染けん

十九、右　大中臣頼基朝臣　一ふしに千代をこめたるつえなれはつくともつきし君かよはひは

二十、左　藤原敏行　秋きぬとめにはさやかに見えね共風の音にそおとろかれぬる

二十一、右　源重之　風をいたみ岩うつ浪の己のみくたけて物をおもふ比哉

二十二、左　源宗于朝臣　常盤なる松のみとりも春くれはいまひとしほの色まさりけり

二十三、右　源信明朝臣　恋しさはおなし心にあらすとも今宵の月をきみみさらめや

二十四、左　藤原清正　天津風ふけゐのうらにゐる田鶴のなとか雲井にかへらさるへき

二十五、右　源順　水の面にてる月なみをかそふれはこよひそ秋のもなか成ける

二十六、右　中納言朝忠　あふ事の絶てしなくは中〳〵に人をも身をもうらみさらまし

二十七、左　権中納言敦忠　伊勢の海ちいろの濱にひろふとも今は何てふかひかあるへき

二十八、右　清原元輔　秋の野のはきのにしきを我宿にしかの音なからうつしてし哉

二十九、左　坂上是則　みよし野の山のしら雪つもるらし故郷さむく成まさる也

三十、右　藤原元真　咲にけりわか山里の卯の花は垣根にきえぬ雪

Hosei University Repository

と見るまて

三十一、左　三条院女蔵人左近　岩橋の夜のちきりもたえぬへしあくる侘しきかつらきの神

三十二、右　藤原仲文　有明の月のひかりを待ほとに我夜のいたくふけにける哉

三十三、左　大中臣能信朝臣　千年までかきれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ

三十四、右　壬生忠見　焼す共草はもえなん春日野はたゝはるの日にまかせたらなん

三十五、左　平兼盛　くれて行秋の形見におく物は吾もとゆひのしもにそ有ける

三十六、右　中務　秋風の吹につけても問ぬ哉おきの葉ならは音はしてまし

一首歌仙本「三十六人歌合」に所収された和歌三十六首の組み合わせには、多くのバリエーションがあることが知られているが、その系統については、新藤協三氏による詳細な研究が備わる。[11] 新藤氏は、三十六首すべて一致する伝本が複数存在する六形態を、各々呼称を付してあげておられるが、この分類にしたがえば、『歌仙大和抄』所収和歌は、下河辺長流『歌仙抄』（万治二年〈一六五九〉刊）に採択された和歌と一致する、「歌仙抄型」となる。[12]

ただし、これは、『歌仙大和抄』が『歌仙抄』に直接依拠したことを示しているわけではない。『歌仙抄』を承けて成立した、同じく「歌仙抄型」の『歌仙金玉抄』にならった結果とみるべきであろう。[13] なお、『歌仙抄』と『歌仙金玉抄』の和歌を比較すると、若干の異同がある。第一に、家持歌第五句を、『歌仙抄』では「人にしれつゝ」とするのに対し、『歌仙金玉抄』では「そことしれつゝ」にしている点、第二に、元輔歌の第三句を、『歌仙抄』では「故郷に」とするのに対し、『歌仙金玉抄』では「我宿に」としている点、そして、第三に、忠見歌第三句を、『歌仙抄』では「春日野を」とするのに対し、『歌仙金玉抄』では「春日野は」としている点である。[14] この三点について『歌仙大和抄』をみてみると、右掲のとおり、いずれも『歌仙金玉抄』と同型となっている。加えて、大中臣「能宣」と表記するべきところを、『歌仙金玉抄』『歌仙大和抄』はともに「能信」としており（『歌仙抄』では「能宣」とする）、これらの点も、『歌仙金玉抄』と『歌仙大和抄』の近さをうかがわせるものであろう。

また、『歌仙大和抄』は、右掲三十六首のほかに書替歌なるものを、兼輔に二首、兼輔以外の歌仙には一首ずつ載せるが、この点も、『歌仙金玉抄』を原拠とすると思われる。というのも、『歌仙金玉抄』は、序文にあたる「大意」に、「哥仙に五種の哥ありてさま〴〵にかけり。神前のゑ屏風障子等にかくときかはり有は是故なりしかれば其かはり哥をもともにかきのせ侍者也」と、三十六歌仙の歌の組み合わせにはバリエーションがあることを示したうえで、各歌につき四首ずつ「かはり歌」、つまり書替歌を載せているのである。『歌仙大和抄』序文には、書替歌について一切説明されておらず、それだけに、『歌仙金玉抄』の方針をそのまま踏襲したと想像できるだろう。さらに、『歌仙大和抄』の書替

Hosei University Repository

歌は、兼輔以外はすべて、『歌仙金玉抄』書替歌の四首中、最初に掲げられている和歌であり、兼輔に関しては、一首め・二首めに掲げられている和歌に該当する。書替歌の選択においても、『歌仙大和抄』は、『歌仙金玉抄』に依拠しているといえそうである。

三　『歌仙金玉抄』から『歌仙大和抄』へ

前章において、『歌仙大和抄』所収和歌を確認するなかで、所収和歌、書替歌の存在、ならびにその選択が、『歌仙金玉抄』によるだろうことに言及した。しかしながら、その影響は、おそらく所収和歌だけにとどまらない。『歌仙金玉抄』も、各歌に、歌仙絵・略伝・注釈・歌意絵を載せており、絵抄としての全体像そのものが、両書の関連を想像させる。『歌仙大和抄』を『歌仙金玉抄』と比べれば、歌仙絵や歌意絵は同一でなく、また、注釈文は、かなり簡潔なものとなってはいるが、新藤氏のご指摘のように、『歌仙大和抄』は、先行する『歌仙金玉抄』の影響下にあると考えられよう。

そこで本章では、『歌仙大和抄』の制作や刊行について探るために、『歌仙金玉抄』から『歌仙大和抄』への流れを跡付けてみたい。

そのためにはまず、『歌仙金玉抄』伝存本についても整理しておく必要がある。『歌仙金玉抄』の諸本については、すでに藤原英城氏が、『京都大学蔵大惣本稀書集成』第十巻[15]所収「解題」においてまとめられている。これに導かれつつ若干の補足をすれば、以下のように整理される。

・天和二年（一六八二）刊　山形屋版　一冊

・天和三年（一六八三）刊　金屋半右衛門版　二巻二冊

・貞享元年（一六八四）刊　松会版　三巻三冊

このうち、山形屋版は、『好色ひともと薄』所収デューレー編『日本の絵本・絵入本目録』[16]による。吉田幸一氏、および藤原氏が、伝存本は未確認とされているもので、稿者も未見である。

したがって、当面問題となるのは、金屋版、松会版となる。両版は、本文内容としては、和歌の収録順に差があること、また、注釈の文章にわずかながら差異があること、仮名遣い等の表記に違いがあること以外はほぼ同じ[17]で、三十六首の和歌の散らし方、使用字母も共通している。ただし、巻数や判型、歌仙絵、歌意絵、および紙面構成は大きく異なっている。また、金屋版が上巻巻頭にのみ口絵を収めるのに対し、松会版は三巻巻頭にそれぞれ収めており、その図像も金屋版とは別種のものである。

以下、それぞれの特徴を記しつつ、両版の差を具体的に示してゆくこととする。

まず、金屋版であるが、本版は伝本が多い。管見のものに限っても、東京国立博物館、国立国会図書館、都立中央図書館加賀文庫（二点）、京都大学附属図書館、西尾市岩瀬文庫、刈谷市図書館、麗澤大学図書館、東京芸術大学脇本文庫、新潟大学佐野文庫、内藤記念くすり博物館図書館（存上巻）、国文学研究資料館（存下巻）に所蔵がある。[18]

この金屋版の書誌については、藤原氏も詳しく記されているが、行論の都合上、本稿にも東京国立博物館本によって示しておきたい。

東京国立博物館蔵（と九七六六）二巻二冊

Hosei University Repository

原装雷文繋地巻竜文様表紙（二十五・九×十九・一糎）。上巻題簽欠、下巻表紙中央の双辺刷枠原題簽に「哥仙金玉鈔（系図伝記）　下」と刻す。四周単辺（二十三・二×表裏通三十四・八糎）。丁付けは各丁裏のど付近に、上巻、一（―十九）、下巻、二十（―廿九）、卅四十、四十一（―四十八）と刻す。上巻全十九丁、第一丁表に口絵、一丁裏から二丁裏に山雲子こと坂内直頼[19]による「大意」、第三丁表以降に、人丸以下十七人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。下巻全十九丁、第一丁表以降に、忠岑以下十九人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。刊記「天和三歳五月吉辰／金屋半右衛門板行」。印記「城端瑞泉寺」「徳川宗敬氏寄贈」「国立博／物館図／書之印」。

紙面構成としては、各歌仙に一丁があてられる形となる。表丁を三段構成にし、上段に略伝と書替歌四首を、中段に和歌の散し書きを、下段に歌仙絵と歌意絵とを各々刻し、続く裏丁に注釈を載せている。ただし、書替歌は裏丁に位置する場合もある（図2）。

一方、松会版については、諫早市立諫早図書館本、堺市中央図書館本、福井市図書館本、東北大学附属図書館狩野文庫本、中京大学図書館本が管見に入った[20]。これらのうち、諫早市立諫早図書館本には、貞享元年の年記が刻されており[21]、本版が、金屋版の翌年には刊行されていたことがわかる。諫早図書館本の書誌は以下のとおりである。

諫早市立諫早図書館蔵（二一二諫一二六）三巻三冊

原装紺色表紙（十九・一×十三・六糎）。表紙中央の原題簽に「哥仙金玉抄（系図伝記）　上（―下）」と刻す。ただし、下巻のみ、表紙左肩に貼付されなおされる。四周単辺（十四・七×十二糎）。ただし左右別郭の丁もあり。版心に丁付けがあり、上巻「上ノ一」「上二（三）」「上ノ四（―八）」「上九（―十五）」、中巻「中一、中二三、中四（―中十四）」、下巻「下一（二）、下又二、下三（―下八。以下虫損により欠失）」と刻す。上巻全十五丁、第一丁表に口絵、第一丁裏・二丁表に山雲子による「大意」、第二丁裏以降に、人丸以下十三人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。中巻全十三丁、第一丁表に口絵、第一丁裏以降に、興風以下十二人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。下巻全十二丁、第一丁表に口絵、第一丁裏以降に、朝忠以下十一人の歌仙絵・和歌・略伝・注釈・歌意絵を収載。刊記「貞享元甲子七月日　松會開刊」。印記「諫早市蔵書記」。

なお、諫早図書館本以外の伝本は、刊記に「七月日　松會開刊」とあるのみで年記を欠いている。

松会版の紙面構成は、金屋版とは異なり、見開きに各歌仙があてられる。また、これも金屋版とは異なり、段組みの構成はとらない。見開きの右面下方にある色紙型の枠内に歌仙絵と和歌を散らし、片や見開き左面下方には、多くは円型や扇面型、団扇型等の枠をとり、その中に歌意絵を描く。これらの余白部分を使って、歌人略伝・注釈・書替歌を刻すという体裁である（図3）。

また、金屋版が大本であったのに対し、松会版では中本となり、字詰めも窮屈な印象を与える。松会は、「万治・寛文・延宝・天和年間（一六五八―八四）までは、主として京都で出版された草紙類を、仮名文字

Hosei University Repository

上巻第１丁裏／２丁表

上巻第２丁裏／３丁表

Image: TNM Image Archives（画像の無断複製を禁ずる）

図２　坂内直頼（山雲子）著　金屋版『歌仙金玉抄』（東京国立博物館本）

Hosei University Repository

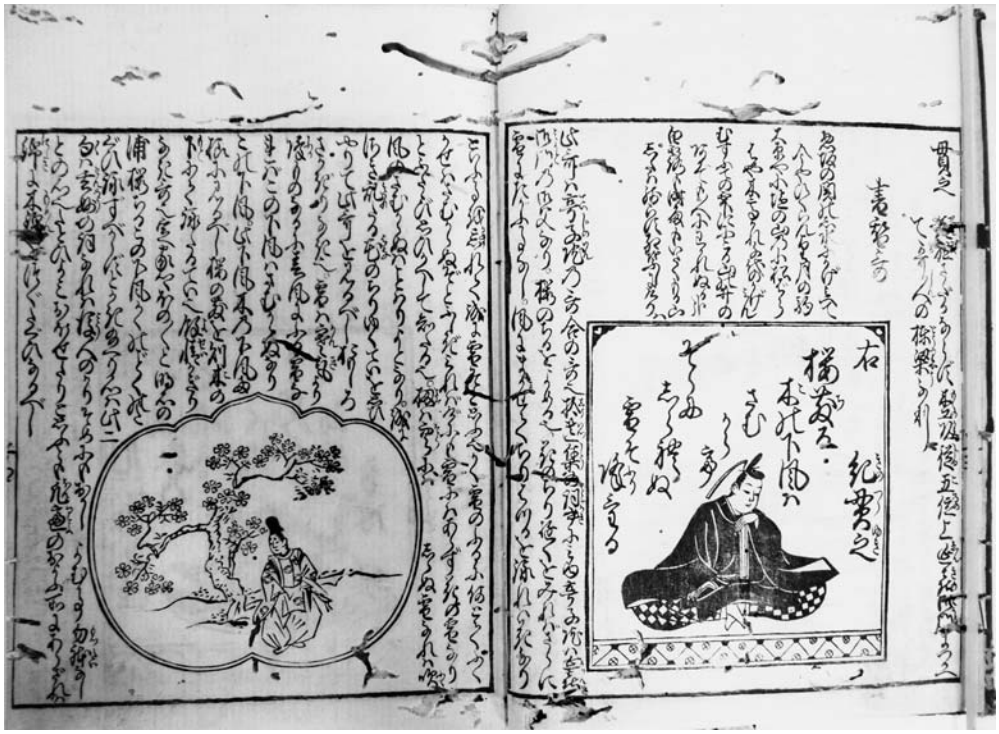

図３　坂内直頼（山雲子）著　松会版『歌仙金玉抄』（諫早市立諫早図書館本）

を多用し、一面の行数を増加させ、挿絵を師宣風にするなどと版式を変えて刊行[23]」するのが常套であった。『歌仙金玉抄』も同様に、版式を変えて版行した一例ということになるだろう。

このように、異版のある『歌仙金玉抄』であるが、『歌仙大和抄』が参照したのはいずれであったのか。このことについては、和歌の収録順が手がかりを与えてくれる。金屋版と松会版の間には、和歌の収録順に違いがあることを先述したが、その違いは、後掲の表に示したとおり、興風、朝忠、敦忠歌の位置である。三十六歌仙和歌は、金屋版の収録順になるのが通常であるから、この差は、松会版の編纂時における錯誤に起因すると見るのが穏当であろう。

注目したいのは、『歌仙大和抄』の和歌収録順も、この松会版と一致するということである。『歌仙大和抄』は、上巻の兼輔、興風のところで左歌人が続き、また、下巻の順、朝忠のところで右歌人が続く。明らかに不自然な体裁であるが[23]、これは、『歌仙大和抄』が、松会版『歌仙金玉抄』に拠ったためにほかならない。三冊本である松会版では、興風が中巻の巻頭に、朝忠が下巻の巻頭に位置しており、左歌人が連続する、右歌人が連続するといったことは意識されにくい。しかし、この松会版に依拠しつつも二冊本として編纂された『歌仙大和抄』では、同巻内において左歌人、あるいは右歌人が連続するという配列が生じることになったのであろう。

先述のように、松会は、京において刊行された『歌仙金玉抄』を、その翌年、版式を変えて江戸で売り出した。『歌仙大和抄』版元の伊勢屋孫三郎にとって、同じ江戸の松会版がより身近なものであったことは想

Hosei University Repository

像にかたくない。三十六歌仙和歌の絵抄を版行するにあたり、松会版『歌仙金玉抄』をよりどころとしたのは、ごく自然な営為であったのだろう。このとき、松会版における、一首の情報をすべて見開きに収載するという体裁にもヒントを得たのかもしれない。

このように、『歌仙大和抄』は、先行する『歌仙金玉抄』、とりわけ松会版の影響下にあると考えられる。しかし、『歌仙大和抄』は、単に松会版『歌仙金玉抄』を簡略化した三十六歌仙絵抄というだけの位置にとどまるものではない。『歌仙大和抄』には、新たに、「光悦流筆跡」という要素が付け加えられているのである。伊勢屋のこの試みは、鈴木氏が指摘されるように、「「光悦三十六歌仙」が与えたインパクト」によるところが大きいだろう。しかし、このような書物が開版されるに至った背景として、本阿弥光悦流筆跡そのものに対する当時の需要についても視野にいれておく必要があるのではないか。以下、章をあらためて、近世における光悦流手本の刊行状況について眺めてみたい。

四　光悦流手本の刊行と『歌仙大和抄』

近世前期、光悦流筆跡に対する需要はどれほどであったのか。以下、このことを探るため、光悦筆跡であることを明示して売りだされた手本、ならびにその筆跡が収められる名筆集を列記してみたい。

・『本朝名公墨宝』（正保二年〈一六四五〉刊）三巻三冊（堺市中央図書館蔵）

伝本は多いが、堺市中央図書館本等が初刻とみられ、年記「正保二年仲冬日」、後表紙見返に「新刊于洛陽四条立売」を刻す。三巻三冊に十八名の能書の筆跡を輯刻する名筆集。光悦筆跡は中巻に収められ、和歌七首が摸刻される。

・『貫道筆集』（正保三年〈一六四六〉刊）一冊（内藤記念くすり博物館図書館蔵）

刊記「于時正保三年正月吉日／平野屋十衛門／右開版堀川通下立売」。王羲之、および日本の能書九名の筆跡を輯刻する名筆集。光悦の筆跡として、詩三首、和歌六首が摸刻される。

・『御手鑑』（慶安四年〈一六五一〉刊）一帖（国立国会図書館蔵）

刊記「慶安四年仲秋日開板／京　二條御幸町五倫書屋／大坂　堺筋町平野硯屋福本／江戸　南伝馬町紀伊国屋」。一三六枚の古筆、および六一六枚の短冊を刻したもの。光悦の筆跡として短冊型に和歌一首が刻される。

・『和漢筆仙集』（貞享二年〈一六八五〉刊）三巻三冊（秋田県立図書館蔵）

刊記「貞享二年乙／丑中春吉日　北太郎町心斎橋筋書林平兵衛」。三巻中、上中巻に日本の能書十四名の筆跡を、下巻に中国の書を輯刻する名筆集。光悦の筆跡として、中巻に詩二首、和歌五首が摸刻される。

・『大虚菴光悦法書』（貞享四年〈一六八七〉）二巻二冊（岐阜市立図書館本館蔵）

刊記「貞享丁卯林鐘中旬　洛下書林植村藤右衛門」（乾巻最終丁）。乾巻に詩十二首、坤巻に和歌十九首が摸刻される。坤巻最終丁に

Hosei University Repository

「光悦」の刻印。なお、京都大学附属総合博物館所蔵『光悦書和歌帖』（外題・内題・刊記なし。題は後補題簽による）は、本書の坤巻と同。

・『光悦流消息　星』（元禄十一年〈一六九八〉刊）三巻三冊のうちの一（糸魚川市歴史民俗資料館蔵）

刊記「維時元禄十一戊寅年孟春日／御書物屋／出雲寺和泉掾元房開版」。同書のほか、『近衛流消息　日』『定家流消息　月』からなる。消息文に加え、巻末にいろはうたと変体仮名をならべ、さらに、漢数字「一―十百」が摸刻される。

・〔光悦流消息〕一巻一帖（内藤記念くすり博物館図書館蔵）

外題・内題・刊記なし（右掲の題は後補表紙の打付書による）。現在折本に装丁されるが、もと袋綴装であったか。詩二十八首、和歌三十四首が摸刻される。

・〔本朝三跡帖／文武名家筆跡〕一帖（西尾市岩瀬文庫）

外題・内題・刊記なし（右掲の題は『岩瀬文庫図書目録』による）。正面刷り。日本の能書、武家、文学者らの筆跡を輯刻する名筆集。光悦の筆跡として短冊型に和歌一首が摸刻される。

このほか、披見していないものの、光悦、尾形宗柏、秋葉工庵、角倉素庵の筆跡を収録した『光流四墨』[24]が、延宝三年（一六七五）に刊行されている。

近世の書籍目録からも、光悦流手本を掲出してみよう。書名のみでは内容の判断が難しいが、明らかに右の掲出書と重複すると思われるものを除き、記しておく。

寛文十年（一六七〇）刊『増補書籍目録』[25]

・『光悦手本』

・『歌仙』尊円　式部卿　光悦

・『百人一首』大本　中本　小本　尊円　式部卿　伝内　光悦

元禄五年（一六九二）刊『広益書籍目録』

・『同（光悦）法書』

・『同（和漢朗詠集）』無ゑ　点付　かな付　まかな付　真草　大字／尊円　瀧本　伝内　光悦　近衛　行能

享保十四年（一七二九）永田長調兵衛刊『新撰書籍目録』

・『光悦詩歌手本』

・『光悦歌仙』

さまざまな光悦流手本が刊行されており、その内容としては、消息文や漢詩、歌書などバリエーションに富む。歌書でいえば、『百人一首』や『和漢朗詠集』のほか、『本朝名公墨宝』には『新古今和歌集』の和歌が、『大虚菴光悦法書』坤巻には、同じく『新古今和歌集』『古今和歌集』の和歌が摸刻されている例がある。とくに、光悦流の歌書が、御家流として広く学ばれた尊円親王や、近世を通じて多くの手本が刊行された瀧本流の祖松花堂昭乗らの書とならんで摸刻されていることは、光悦の筆跡に対する需要の高さを示すものとして注目しておいてよいだろう。

むろん、三十六歌仙和歌も、版本手本の素材として多く用いられていた[26]。三十六歌仙は、いずれも有名な歌人であるということ、三十六首というのが比較的コンパクトなまとまりであるということ、また、それだけに、紙面を大きく用いて散し書きの様々なバリエーションも示しやす

Hosei University Repository

いということ、そして、もとより三十六歌仙和歌が書芸術と関係が深く、尊円親王や、近衛前久、同信尹、昭乗ら、多くの能書が揮毫してきたという伝統も、その背景にある。[27]

このような、種々の光悦流手本の刊行状況や、三十六歌仙和歌と書芸術の関係を視野にいれれば、伊勢屋が三十六歌仙の注釈書を開版するにあたり、光悦流を採用した意図がみえてこよう。『歌仙大和抄』の制作は、当時多かった光悦流手本の版行をも視野に入れたものではなかったか。おりしも、元禄七年に刊行された『万宝全書』「本朝古今名公古筆諸流」には、「光悦流」の項目がたてられており、光悦書風の広がりをうかがわせる。『歌仙大和抄』の版行は、広く光悦の筆跡そのものに対する需要をも見込んでのものであったのだろう。加えていえば、初学者向けの和歌注釈書であった『歌仙大和抄』に、書の要素を付載することは、読者層を視野にいれての試みであったともとらえられる。当該の和歌にまつわる様々な情報や教養を、ともに提示し一覧できるようにした趣向ではなかったか。

先に光悦流手本の刊行状況を概観したが、『歌仙大和抄』は、江戸の書肆が光悦流を開版したごく早い時期の書物であったと思しい。同書は、江戸における光悦流流通の起点という意味でも、少なからぬ意味をもっているといえるであろう。

なお、『歌仙大和抄』は、後に『光悦歌仙』（一冊。国文学研究資料館蔵）という別書を派生させている。『光悦歌仙』は、『歌仙大和抄』から、序文・和歌・歌仙絵を抜きだしたもので、東京国立博物館本等と同じ、元禄九年須藤権兵衛の刊記をもつ。国文学研究資料館本は、『歌仙大和抄』元禄九年印本の序文・和歌・歌仙絵・刊記部分と同版であり、『歌仙大和抄』刊行後、再編されたものとみてよい。[28] さらに、小松茂美氏所蔵『新版歌仙』（一冊。寛保三年〈一七四三〉刊）[29]も、この『光悦歌仙』と内容を同じくすると思われる。小松氏によれば、『新版歌仙』は、京の書肆万屋作右衛門求版本であるという。

こうした『光悦歌仙』の存在は、『歌仙大和抄』が、元禄期の江戸において反響を呼んだことを想像させる。さらには、五十年後の京都において『新版歌仙』が出されていたことも興味深い。『歌仙大和抄』は、絵抄と切り離され、光悦流がクローズアップされる形でその姿を変えながら、迎えられ続けていったのである。

おわりに

以上、『歌仙大和抄』の伝存本の様相を整理したうえで、『歌仙大和抄』が、松会版『歌仙金玉抄』に基づくこと、また、刊行の背景のひとつとして、光悦流に対する需要の高まりもあげられるであろうことを述べてきた。

稿者は、近世の印刷の発展による書文化の広がりに関し検討を重ねているが、[30]『歌仙大和抄』のような出版物にも、新たな解明の視点を見出すことができると考える。あくまでも三十六歌仙和歌の注釈書という位置付けにある該書は、書研究においては見落とされがちな資料であるかもしれない。しかしながら、こうした資料こそ、近世の書文化が、出版と結びつきながら、そして、諸分野と取り合わせられながら、実に多様

Hosei University Repository

な形で人々に享受されていった様相を教えてくれているのではないだろうか。

注

（1）本稿でとりあげる『歌仙大和抄』、ならびに光悦流手本は、版下の筆者を光悦と想定するものではなく、あくまでも「光悦流」で摸刻され、当時「光悦」と銘打って刊行・流通していたという点を重視している。

（2）林進氏は、嵯峨本「三十六歌仙」と、角倉家に伝来し角倉素庵筆とされる『「百人一首・尊円本「三十六人歌合」』（東京国立博物館蔵）の和歌、配列、写し間違い、および書風が同じであることから、嵯峨本「三十六歌仙」の版下を素庵が書いたものとの見解を示しておられる（林進氏「素庵の軌跡――その書跡と書誌学的業績について――」大和文華館図録『没後三七〇年記念角倉素庵――光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で――』〈大和文華館、二〇〇二年〉、「天理図書館所蔵の嵯峨本『三十六人歌合』――その依拠本と本文版下の筆者について――」『ビブリア』一二七号、二〇〇七年五月）。

（3）鈴木淳氏「光悦三十六歌仙考」（国文学研究資料館特別展示図録『江戸の歌仙絵――絵本にみる王朝美の変容と創意――』〈国文学研究資料館、二〇一〇年〉）、および同書図版解説。以下、本稿における鈴木氏のご研究の引用は、すべて同書による。なお、川瀬一馬氏も、嵯峨本以降三十六歌仙絵本が多く出版されたことについて、「如何当時、光悦書風の歌仙が流通したかを知る事が出来る」と述べておられる（『増補古活字版之研究』〈ＡＢＡＪ、一九六七年〉）。

（4）新藤協三氏「『歌仙繪抄』翻刻・解説」（『三十六歌仙叢考』新典社、二〇〇四年）。

（5）桃仙子については未詳。『歌仙大和抄』序文は以下のとおり。

　此三十六哥仙は四条大納言いにしへの名人をあけて。ゑらまれし也。いまあらたに。歌の心を。絵にあらはして。とことはの。花紅葉に。世のうきを思。夏の日の。うたゝね。冬の夜の。夢心地にも。千里の外まて。遊ひありくやうに覚え。しかのみならす。あさるきゝすの哥を。あはれみては。放埒の心をも。やむへきことはりあり。殊に此道のたからのやまと抄といはんもむへなり。武陽桃仙子序

（6）漆山又四郎『絵本年表』一（青裳堂書店、一九八三年）。

（7）『古典籍展観大入札会目録』（東京古典会、二〇〇九年）。

（8）丁付けに関して、国文学研究資料館本に依拠して補足する。国文学研究資料館本の歌仙絵丁上巻には、「哥ノ三」、同じく下巻には、「哥ノ十四」、また、絵抄丁上巻には、「哥ゑノ一」「哥ゑノ二（一九）」また、同じく下巻には「哥ノゑ十一」下」「哥ゑ十四」下」などと刻されているのが確認できる。すなわち、歌仙絵丁には「哥ノ（数字）」、絵抄丁には「哥ゑノ（数字）」「哥ノゑ（数字）」「哥ゑ（数字）」と刻されていたのであろう。いずれも、数字は上巻から下巻へ通し番号となっている。

（9）国文学研究資料館本について、注（3）前掲書『江戸の歌仙絵――絵本にみる王朝美の変容と創意――』には、元禄十三年求版本と解説される。

（10）井上隆明氏『改訂増補近世書林板元總覧』（青裳堂書店、一九九八年）。

（11）新藤協三氏「一首歌仙本『三十六人歌合』の諸形態」（注（4）前掲書）。

（12）嵯峨本「光悦三十六歌仙」とは本文が異なる。

（13）『歌仙抄』と『歌仙金玉抄』の関係については、蔵中スミ氏「『歌仙金玉抄』私見――歌仙和歌の一系統としての位置付け――」（『江戸初期の三十六歌仙　光琳・乾山・永納』〈翰林書房、一九九六年〉）に詳しい。

（14）ただし、これらは『歌仙金玉抄』『歌仙大和抄』のみに見られる句型ではない。家持歌については、加藤磐斎『三十六歌仙和歌抄』（万治三年〈一六六三〉跋。有吉保編『三部抄増註　三十六歌仙和歌抄』〈『加藤磐斎古注釈集成』六。新典社、一九八五年〉による）が「そことしれつゝ」、元輔歌については、近衛信尋筆『三十六人歌合』が「わがやどに」としている例などがある。

（15）京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成』第十巻（臨川書店、一九九五年）。

（16）『好色ひともと薄』（古典文庫、一九八五年）所収「デューレー編『日本の絵本・絵入本目録』における元禄期以前の絵入本私考」。

Hosei University Repository

(17) 松会版『歌仙金玉抄』「大意」では、金屋版「大意」文末の「天和三年五月雨の徒然にしるし畢ぬ」を削るという処置もなされている。

(18) このうち、刈谷市図書館本、麗澤大学図書館本、東京芸術大学脇本文庫本、新潟大学佐野文庫本は、国文学研究資料館マイクロフィルムによる。なお、京都大学附属図書館本の翻刻が注(15)前掲書に、都立中央図書館加賀文庫蔵の一本の影印が『江戸時代女性文庫』九〇（大空社、一九九八年）に、各々収められている。

(19) 山雲子こと坂内直頼については、塩村耕氏「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」（『近世前期文学研究 ― 伝記・書誌・出版 ―』若草書房、二〇〇四年）に詳しい。

(20) このうち、東北大学附属図書館狩野文庫本は狩野文庫マイクロフィルム、中京大学図書館本は、国文学研究資料館マイクロフィルムによる。

(21) 柏崎順子氏編『増補松会版書目』（青裳堂書店、二〇〇九年）に諫早図書館蔵『歌仙金玉抄』刊記の写真が掲載される。

(22) 『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年）。

(23) 『歌仙大和抄』から派生した『光悦歌仙』も同じ体裁であり、従来、「配列は「左」「右」の交互を基本としながら、一部「左」「左」と続いたりする乱れがある」と評されている（注(3)前掲書『江戸の歌仙絵 ― 絵本にみる王朝美の変容と創意 ―』）。

(24) 注(2)前掲書『没後三七〇年記念角倉素庵 ― 光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で ―』。尾形宗柏、秋葉工庵、角倉素庵はいずれも「当時における光悦流の名手」（小松茂美氏『日本書流全史』〈講談社、一九七〇年。『小松茂美著作集』巻十五―十七巻〈旺文社、一九九九年〉）とされる人々である。

(25) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房、一九六三年）。以下の近世書籍目録もこれによる。

(26) 松花堂昭乗の瀧本流を例にとれば、『三十六歌仙』（東京都立中央図書館加賀文庫蔵。別本が二点所蔵される）や、『瀧本三十六歌仙』（寛政四年〈一七九二〉刊、市立函館図書館蔵）等が現存する。いずれも多様な散し書きで和歌を摸刻している。

(27) 近衛信尹筆「三十六歌仙帖」、松花堂昭乗筆「三十六歌仙帖」（ともに東京国立博物館蔵）等。三十六歌仙和歌が書芸術と密接なかかわりをもつことについては、新藤協三氏「『三十六人歌合』と入木道」（注(4)前掲書）に詳しい。また、寛永の三筆の三十六歌仙和歌作品については、蔵中スミ氏「寛永の三筆と三十六歌仙 ― 歌仙絵と歌仙和歌の系譜 ―」（注(13)前掲書）も参照されたい。

(28) 注(3)前掲書『江戸の歌仙絵 ― 絵本にみる王朝美の変容と創意 ―』における『光悦歌仙』図版解説でも、「丁付から判断する限り、二冊本の『歌仙大和絵抄』が先行したことは確実である」としている。また、鈴木氏は『光悦歌仙』について、「江戸でも光悦書『三十六歌仙』の需要が顕在し、「光悦」のブランドがもて囃されたことを証明する一点」と述べておられる。

(29) 小松氏注(24)前掲書『日本書流全史』所収「架蔵手習手本一覧」。光悦流による三十六歌仙和歌の摸刻で、武陽桃仙子の序を有すという。享保十四年刊永田長調兵衛刊『新撰書籍目録』所載『光悦歌仙』も同書を指すか。なお、小松氏は、光悦流手本としてほかに、『本阿弥光悦唐詩選帖』（貞享四年〈一六八七〉。植村藤右衛門刊）、『歌僊』（元禄三年〈一六九〇〉。安井弥兵衛蔵）、『三筆流消息』（三巻中第二冊が光悦流消息。ほか第一冊が近衛流、第三冊が松花堂流。元禄十一年〈一六九八〉、出雲寺和泉掾元房開版）、『光悦法帖』（和歌手本）、『城西楼法帖』（詩歌手本）、『三十六人歌合』（土佐光起画）、『本阿弥光悦かな帖』、『徳友斎法帖』、『光悦消息』（消息拡大手本）、『古今和歌集』を所蔵されていた由。『本阿弥光悦唐詩選帖』は、本稿で掲げた『大虚菴光悦法書』乾巻と同種と思われる。

(30) 拙稿「印刷による書の再生 ― 『本朝名公墨宝』の刊行について ―」（楠元六男氏編『江戸文学からの架橋 ― 茶・書・美術・仏教 ―』〈竹林舎、二〇〇九年〉）、同「瀧本流の流行と展開　付瀧本流法帖出版年表稿」（拙書『松花堂昭乗と瀧本流の展開』思文閣出版、二〇一一年）等。

本稿は、平成二十五年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費（基盤研究(B)）「日中比較による書学資料の文献学的研究」（代表者菅野智明、研究課題番号2

Hosei University Repository

４３２００６６）による研究成果の一部である。

【付記】 脱稿後、高橋則子氏「役者絵『見立三十六歌撰』について――文学と歌舞伎から――」（『歌舞伎　研究と批評』四十九号、二〇一三年五月）において、松会版『歌仙金玉抄』と『歌仙大和抄』の歌意絵の類似が指摘されていることを知った。本稿第三章の両書のつながりを説く点において、高橋氏のご指摘と重なるところがあるが、高橋氏が歌意絵に注目されるのに対し、本稿は所収和歌に基づいて論じたものであることから、敢えて掲載する次第である。なお、高橋氏は、『歌仙大和抄』について、松会版『歌仙金玉抄』とならんで「近世期の三十六歌仙和歌の歌意絵に一定のイメージを定着させていったと思われる」とされ、歌意絵入り三十六歌仙絵本における史的意義についても述べておられる。

Hosei University Repository

表　金屋版『歌仙金玉抄』・松会版『歌仙金玉抄』・『歌仙大和抄』和歌収録順

	金屋版『歌仙金玉抄』（天和三年刊。東京国立博物館本）	松会版『歌仙金玉抄』（貞享元年刊。諫早市立諫早図書館本）	『歌仙大和抄』（元禄九年印。東京国立博物館本）
1	（上巻） 左　柿本人丸	（上巻） 左　柿本人丸	（上巻） 左　柿本人丸
2	右　紀貫之	右　紀貫之	右　紀貫之
3	左　凡河内躬恒	左　凡河内躬恒	左　凡河内躬恒
4	右　伊勢	右　伊勢	右　伊勢
5	左　中納言家持	左　中納言家持	左　中納言家持
6	右　山邊赤人	右　山邊赤人	右　山邊赤人
7	左　在原業平朝臣	左　在原業平朝臣	左　在原業平
8	右　僧正遍昭	右　僧正遍昭	右　僧正遍昭
9	左　素性法師	左　素性法師	左　素性法師
10	右　紀友則	右　紀友則	右　紀友則
11	左　猿丸大夫	左　猿丸大夫	左　猿丸大夫
12	右　小野小町	右　小野小町	右　小野小町
13	左　中納言兼輔	左　中納言兼輔	左　中納言兼輔
14	右　中納言朝忠	（中巻） 左　藤原興風	左　藤原興風
15	左　中納言敦忠	右　藤原高光	右　藤原高光
16	右　藤原高光	左　源公忠朝臣	左　源公忠朝臣
17	左　源公忠朝臣	右　壬生忠岑	右　壬生忠岑
18	（下巻） 右　壬生忠岑	左　斎宮女御	（下巻） 左　斎宮女御
19	左　斎宮女御	右　大中臣頼基朝臣	右　大中臣頼基朝臣
20	右　大中臣頼基朝臣	左　藤原敏行	左　藤原敏行
21	左　藤原敏行	右　源重之	右　源重之
22	右　源重之	左　源宗于朝臣	左　源宗于朝臣
23	左　源宗于朝臣	右　源信明朝臣	右　源信明朝臣
24	右　源信明朝臣	左　藤原清正	左　藤原清正
25	左　藤原清正	右　源順	右　源順
26	右　源順	（下巻） 右　中納言朝忠	右　中納言朝忠
27	左　藤原興風	左　権中納言敦忠	左　権中納言敦忠
28	右　清原元輔	右　清原元輔	右　清原元輔
29	左　坂上是則	左　坂上是則	左　坂上是則
30	右　藤原元真	右　藤原元真	右　藤原元真
31	左　三条院女蔵人左近	左　三条院女蔵人左近	左　三条院女蔵人左近
32	右　藤原仲文	右　藤原仲文	右　藤原仲文
33	左　大中臣能信朝臣	左　大中臣能信朝臣	左　大中臣能信朝臣
34	右　壬生忠見	右　壬生忠見	右　壬生忠見
35	左　平兼盛	左　平兼盛	左　平兼盛
36	右　中務	右　中務	右　中務

※歌仙の表記は底本に拠る。